

芥川賞全集

第七卷



文藝春秋

芥川賞全集 第十卷

著者

三木 卓

森 敦

野呂 邦暢

阪田 寛夫

日野 啓三

林 京子

中上 健次

岡松 和夫

昭和五十七年十一月二十五日 第一刷

定価 一八〇〇円

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五—一二二一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

目次

されど われらが日々――

柴田 翔 5

玩具

津村節子 121

北の河

高井有一 153

夏の流れ

丸山健二 177

カクテル・パーティー

大城立裕 219

徳山道助の帰郷

柏原兵三 269

選評

受賞者のことば

423

年譜

429

341

題 裝

字 丁

中 栗

田 屋

功 充

芥川賞全集

第七卷

されど
われらが日々――

柴
田
翔

（第五十一回 昭和三十九年上半年）

文春文庫「されどわれらが日々——」（昭和四十九年六月発行、昭和五十七年一月第十六刷発行）を底本とした。

道化

(王に) おお、おい

たわしや、王様には裏

切られなさったと！

して、一体、誰方にて

ございます？

序章

私はその頃、アルバイトの帰りなど、よく古本屋に寄った。そして、漠然と目についた本を手にとって時間を過ごした。ある時は背表紙だけを眺めながら、三十分、一時間と立ち尽した。そういう時、私は題名を読むよりは、むしろ、変色した紙や色あせた文字、手ずれやしみ、あるいはその本の持つ陰影といったもの、を見ていたのだった。

それは無意味な時間潰しであった。しかし、私たちのすること、何か時間潰し以外のことがあるだろうか。それに、私は私なりに愛書家でもあったのだ。

どこの古本屋でも、店先に一冊二十円程度の均一本が、一かたまり並んでいる。私はよくそういう本を、買う気もな

しに手にとったものだった。汚れ、みすばらしくなった本の群れを、一冊一冊見分けて行くと、『育児法』だとか『避妊法』、あるいは『革命と闘争』だとかいう題名の中に、時折、英文学専攻の大学院学生である私すら題名を知らないような英文学関係の古ぼけた翻訳書がまじっていた。訳者も多くは、もはや知られない人であった。私はそういう本を手にとると、本文よりも、訳者の後書きを読んだ。そこには、大抵は、まだあまり知られていないその書を日本に紹介することが、どんなに有意義なことであるかが、少し熱っぽい調子で力説してあった。それは、その人の出した、一生でただ一冊の本であったかも知れない。おそらく、だから、後書きも少し興奮した様子なのだ。が、彼がそんなに期待して出した本も、殆ど人に知られることなく場末の古本屋の均一本の中につつまれていく。

だが、私は別にそういう後書きに吝^{けち}をつける積りはないのだ。そのちょっとした尊大な言いまわし、日本における文学観の偏向をいまいしめる学者らしい重々しい口調の中には、奇妙に子供らしい喜び、生の重大事にかかわっているという興奮からくる、意識しない快活さが感じられた。それは、かつて私の友だちであった一人の女子学生が自殺した時、彼女の友人の学生たちが、その死を悲しみながら、なお無

意識のうちに示していた快活さ、あるいは嬉しさと言ってもよいようなもの、と似ていると思えた。だが、彼ら訳者にとって、本を出すことはやはり重大なことであり、彼らはそのためにちよつと興奮し、快活になっていい当然の権利を持っている。生が結局は、各種の時間潰しの堆積であるならば、その合間に、ちよつと夢中になれる、あるいは夢中になった振りのできる気晴らしのあることは悪いことではない。俺だって、と私は、薄汚れた古本の間に立ちつづけながら思った。俺だって、あと半年もすれば、地方の大学の語学教師になり、やがて一冊位訳書も出すだろう。そしてその時は、俺だってやはりちよつと興奮し、熱っぽい後書きを書き、そして、少しの間、幸福になるだろう。

第一の章

ある冷たい雨の降る秋の夕方、私は郊外のK駅のそばの古本屋に寄った。それはその月の最後のアルバイトの帰りであった。

いつも通り、何気なく古本に眼をさらしているうちに、私は上の方の棚にまだ真新しいH全集があるのに気がついた。それは、つい先月か先々月に完結した全集であった。あまり読まれることのないHの全集であるだけに、値も高いものであった。新刊本がすぐ古本屋に出ることは珍らしいことではない。しかし、かなりの愛着を持っている人であれば、はじめから買わないだろうH全集が、最終の配本から一月足らずのうちに古本屋の棚にあることは、やは

り少し奇異に感じられた。

私はH全集から一冊抜き取り、値段を調べた。それは、かなり安かった。私は買おうと思った。だが、それは定価の三分の二にもならぬ値段ではあったが、なお私の持っている金では足りなかった。私はその時、その日に貰ったその月のアルバイトの収入を持って、それだけは本に費やしていい金であったが、H全集はその凡そ倍の値であった。私は、本屋で本を眺めるのは、好きであった。だが、ある本を、ただその本の魅力にひかれて、どうしても自分の手に入れ自分のものにしたいという、いわゆる世の愛書家たちの執念といったものは、持ち合わせていなかった。H全集も、前から欲しいとは思っていたが、一冊ずつ買っても、なお非常に高いので、あえて買う積りはなかった。

しかし、今その真新しい一冊を手にとって古本屋の古ぼけた棚、崩れ落ちそうな本の堆積の間に立ち尽した私は、何か奇妙なものにとらわれていた。それはH全集というよりは、その一揃であるところの、私の前に並び私の手にある一揃が、あるいはその一揃の持つある一つの奇異な雰囲気、私の心に、いや、むしろ私の存在自体に、からみついてきているのだった。その奇異な雰囲気は、汚れた古ぼけた本の列と、新しいH全集という異様な対比から生まれた

ものであったが、ただそれだけで説明し切れるものではなく、そのH全集がそこにあるということ——それは何の変哲もないH全集であり、何の変哲もない古本屋であったが——そのH全集がそこにあるということ、その際、単に靜的な新旧の対比が問題なのではなく、そのH全集の在る全ての關係における在り方、つまりそこにおけるH全集の存在そのもの、が、ある異様さとして、私に向ってきているのであり、それは私の存在の殆ど意識しない根にからみついて離れないように思われた。そのH全集を私が買うだろうということは、もはや動かし難いことであつた。私は、自分の意志に反したことを無理やりせねばならぬような重苦しい気持で、帳場の方を見やつた。

私がH全集の代金の半分を払い、残りの十冊を翌月まで取って置いて呉れるよう、頼んだ時、無口で愛想のない主人は、眼鏡越しに私の顔をじろじろ眺めて、

「ようございます」

と言つた。そして、口の中で半分呟くようにつけ加えた。「こんな本を、買つてすぐ売つてしまふ人もいれば、あんたみたいに無理して、また買う人もいるんだね」

私は妙に氣になつてたずねた。

「これを買つたのはどんな人でしたか」

主人はもう一度私の顔をじろじろと眺めると、

「古本の市で買つてきたんだから、そんなことは判りませんよ」

とそつけなく答え、黙つた。

外に出ると、雨は相変らず降りつづけ、その冷たさは背広のえりや、袖口から入り込んで、肌に執拗にまつわりついてきた。私はH全集を買つてしまつて、何故か不安な氣持になつていた。私は、背中から体中に拡がってくる惡寒に堪えながら、なお小一時間かかつて下宿へ歸つた。

雨は間もなく上がり、それから數日、空が抜けるような青さに澄み切つた日が続いた。土曜日も天氣は崩れなかつた。窓を開けると、さっぱりした冷やかな大氣が部屋の中へ流れ込んだ。私は少し幸福だつた。

土曜日は節子のくる日だつた。節子は私の婚約者だつた。私たちは翌年の四月、私が大学院の修士課程を修了したら、結婚することになっていた。私の就職は、F県のF大に内定していた。

節子は英語とタイプと、それに少しばかりのフランス語ができ、翻訳係兼タイピストとして、ある商事会社に勤めていた。結婚したら節子はそこをやめ、F県で英語の先生

の口でも探すつもりであった。私たちは結婚を、強いて急いではいなかったが、またあまりくり延べるつもりもなかった。

私たちは愛し合っていただろうか。それは判らない。恋人同士と呼ばれてよいような仕方では、愛し合っていないかだったかも知れない。ただ私たちは、互に好感を持ち合っていたし、やって行けるだろうと考えていた。少なくとも、私は、自分たちの間柄について、そう考えていた。

節子は私の遠縁の親戚であった。そして、親たちが気合い、親しかったので、私と節子は、小さい時から従兄妹同士のようなつき合い方をさせられてきた。だが、成長するにつれ、二人は自分たちが特別に気の合う間柄という訳でもないことに次第に気づいた。以前の節子は、今と違って、激しい気性だった。私もそうおとなしいたちではないだろう。しかし、節子の持っていた何ものかが、私には欠けていたらしい。私たちは中学時代、高校時代、休みには互の家に行き来して、遠慮のない親しい間柄ではあったが、互が相手の中へ深く入り込んでしまうということとは決してなかった。

私が東大に入って上京してきた年、節子は高校三年であった。次の年節子は東京女子大に入り、翌年英文科に進ん

だ。しかし、私は節子の家である佐伯をあまり訪れなかった。私は佐伯の人たちを嫌ってはいなかった。だが、それはわずらわしかった。私は節子に好意を持ちつづけてはいたが、佐伯の人の一人である節子よりは、ただの女友だちとつき合う方が心安かった。

そうやって、私は駒場で、留年の一年を含めて三年、本郷で二年、平凡な学生として過ごし、大学院に進んだ。専門は英文学だった。

その間、恋をしなかったと言えば、嘘になろう。そして、恋する時、私は大体真面目だった。だが、私が真面目であればある程、私の恋は、いつも、真面目な恋とはならず、情事といったようなものになって行つた。ある時期には、私は自分の情事を、これは情事ではない、本当の恋なんだと思ひ込もうとし、またある程度思ひ込みもした。だが、女の子たちは、私が彼女たちのことを、決して本当には愛していないこと、愛することのできないことを敏感に感じ取り、私から離れて行つた。

大学院に入った年の春、その合格祝いに招かれた佐伯の家で、私は、節子と結婚しないかということを、ほのめかされた。節子には異存はないような口振りであった。私はその話よりも、久し振りで注意してみた節子が、以前とは

はつきり違った感じを持ってきたのに、気をひかれた。感じのいい笑い顔、少し大人びたが、やはり娘らしい優しき、時折見せる負けん気、そういったものには全然変りがなかった。だが、その時の節子には、どことなく、しかしはつきりと、以前には決してなかった、全ての事柄に対するあらゆる種の投げやりな感じがあった。節子を知らぬ人なら、その変化には気がつくまい。仮に気がついても、強情な所があった娘が、あまり自分に拘泥しなくなった、よい傾向と思うだろう。節子は投げやりになったその分だけ、ひとに優しくなっていたから。だが、私は節子を知っていた。節子は苦しんだのだな、と思った。

節子は大学に入った当座、女子大の歴研の部員になり、当時学生の中でも最左翼として知られていた駒場の歴研との合同研究会に出席していた。私も一、二度、駒場の構内で節子と出合い、立話をしたことがある。節子は、ある時は楽しげな様子であり、ある時は疲れてみえた。また、研究会だけではなく、実際の学生運動とも無関係ではなかったらしい。私が、他の平凡な学生たちと同様、何事も経験だと思っただけで出かけた一、二回のデモの折にも、東京女子大の一握りばかりのささやかなデモ隊の中に、節子の姿をみた。そして、そういう活動の間に、節子が恋愛をしていな

いはずはないと、私には思われた。私の知っている節子は、何人もの男の学生とつき合いながら、一人も好きになる相手を見出せないような女の子ではないはずであった。

だが、私との結婚話が出た時、節子は大学を終え、就職することになっていた。(私が五年かかったので、私たちの卒業は一緒になっていた。)政治運動には、もう関心を持てないらしいかった。恋人もいない様子であった。私は、節子さえ私を受け入れる気になっていくのなら、節子と結婚してもいいと思った。私たちは恋し合うこと、あるいは恋人らしく愛し合うことはできない。それは仕方がないことだ。だが、私たちは互に好意を持ち合っている。私たちはうまくやって行けるだろう。大学に入って直ぐに、互に夢中になって結婚してしまった場合より、ずっとうまくやって行けるだろう。そう私は考えた。

その日、節子は一時半頃来た。節子の勤め先の商社のある大手町のビルから、私の下宿のある西北の郊外の町までは、小一時間かかった。地下鉄で池袋に出、そこから私鉄に乗ってN駅にくる。N駅のあたりから私の下宿の附近にかけては、ここ二、三年住宅がバラバラと立ち並びはじめたが、その間にはまだのどかな畑地が広がっている。節子はN駅から、そこを通過して、バスで私の下宿に来た。

私たちは週に二遍会った。毎火曜日の夜は、アルバイトの帰りに、私が佐伯へ行った。それは佐伯の叔母の希望だった。土曜日は映画に出かけたり、下宿ですつと過ごしたりした。私たちは、かなり出不精の方であった。

その日も、私たちは出かけなかった。そして、いつも私たち二人が下宿にいる時、そうするような仕方、時を過ごした。夕方、節子は手際よく、簡単な夕食を作った。

昼間、晴れ上っていた空は、夕暮時から黒い雲に低くおわれ始め、かなり強い風が、二階にある私の部屋を揺らして、まわりに拡がった畑地を吹きぬけて行った。風が吹き渡るにつれ、土埃りが広い畑地一面に巻き上がり、わずかに残る残光にその薄暗い影を浮き上がらせて、移動して行った。

私がガラス窓越しに外を眺めながら、オープンシャツのボタンをとめていると、野菜をいためていた節子は、私の肩越しに言った。

「私、こうやって、一生あなたのお食事、作って上げるのかしら」

節子の声は、少しもの憂げにきこえた。

「奥様稼業が厭なら、一生勤めていたっていいよ」
私はそう答えながら、少し無造作すぎたと思った。私が

節子に優しくしようとすると、どうしても、そういう風になるのだった。

「ううん。やっぱり私が作って上げる。おいしいもの食べさせて上げるわよ」

節子は、別に私の無造作さを怒りもせず、節子らしい優しい口調で、そう言ってくれた。

私たちは概してかたくなではなかった。私たちは大体において、できるだけ相手に優しくしようとしたし、また事実優しかった。私たちは、かたくなになり、相手に対する優しさまでを犠牲にして守るべき何ものをも、持っていなかった。

節子はいため終った野菜を皿にとりながら、ふとつけ加えるように言いきした。

「ただね……」

「ただ、何だい」

節子は少し考えるような様子をした。が、すぐ、

「ううん、何でもない」

と、小さく首を振った。

食事が終わったあと、節子は足を少し崩し、ちゃぶ台に肘をついて、私の胸元をみるともなくみながら言った。

「横川さんね、ばれちゃったんですって」

「誰に」

「先生の奥さんに」

横川というのは、節子が会社で机を並べている女の同僚であった。節子と同じ年に都内のある大学の仏文科を出て、一人でアパート暮らしをしているのだが、大学の時の主任教授と特に親しい関係にあるという話だった。その教授の顔は、私も雑誌で見たことがあったが、どこと言って目立つ所のない、どちらかと言えば貧相な感じの人であった。まだかなり少女っぽい所の残っている横川和子が、教授と何故そうした関係になったのか、局外者の私には全く想像ができなかった。

「先生のお宅には電話も手紙も駄目だし、研究室の方は、声も筆跡も知られているから、なお更、困るし」

節子は、何とはなしに茶のみ茶碗を手にとり、それを両手で包むようにして揺さぶりながら続けた。

「それで、私に代りに研究室に電話をかけて呉れて頼まれてしまつて、断る訳にも行かないから、昨日の昼休みにかけて上げたの。先生が出た所で代つたら『先生、私』って涙声出しているのよ。悪いから、すぐ離れたので、そのあとは知らないけど、今日は、仕事が終わると、すぐ飛び出して行つたわ」

私はいつか行つた新宿の天ぷら屋のことを思い出した。

新宿にしては少し高級な店で、推理小説の翻訳の下請けで少し金のあつた私は、誕生祝いも兼ねて節子を中心に連れて行つたのだが、スタンドに坐ると、若い同士の二人連れは自分たちだけで、あとは、まわりの客も、また奥の小部屋に出入りする客も、みな一つの例外もなく中年の男と若い女、それも課長級の会社員とBGといった感じの組み合わせであることに気づいた。そして、男たちはさり気ない顔をしているが、若い女たちは、あるいはじろじろと、あるいはちらちらと、しかしみな一様に私たちを気にし、憎むような視線を送つてよこしていた。節子はそれを感じとつて、避けるように私に身を寄せた。私は、彼女たちは幸福ではないのだな、そして、私たちを幸福だと思っているのだな、と感じた。事実、そういう時の節子は本当に幸福そうにみえた。それとも、節子は本当に幸福だったのだろうか。

「横川さん、可哀想だね」

私は節子に答えた。

「可哀想よ、そりゃあ。ただね……」

「えっ」

節子は、まだゆっくりと茶碗を揺さぶっていた。